

# ばく りゅう 麦粒

2018. Winter

麦粒 / NO. 130

発行・キリスト教センター

## チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」のお話をブックレットにまとめ、発行しています。無料でどなたにでも差し上げますので、ご希望の方は、キリスト教センターへどうぞ。チャペルにも置いてあります。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洸善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纓)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(柏木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？  
—こどもの物語と聖書に見られるくしょうがい者>差別—」  
(荒井 英子)
- No.14. 「お父さん、僕はなに人？ 一間 (はざま) から読む聖書—」  
(金 永秀)
- No.15. 「人権・生命の尊厳—野宿生活者の現場から—」(松本 普)
- No.16. 「地球に、そして日本に生まれて今ここにいる」(太田 信吉)
- No.17. 「メイク・ア・ウィッシュ〜夢の応援団」(原 順子)
- No.18. 「人間関係を生きる知恵」(島 しづ子)
- No.19. 「命のことば」(水谷 誠)
- No.20. 「宗教が戦争の原因？—神教がアブナイ？」(桃井 和馬)
- No.21. 「福田敬太郎—神に向き合った生涯」(小野 静雄)

## 目 次

- ふえるんです…………… 日 沖 直 子 (3)
- 映画『ハンナ・アーレント』から考えたこと… 谷 口 篤 (7)
- 伝えるための言葉…………… 柳 善 和 (10)
- イエスと一緒に歩く…………… 葛 井 義 憲 (13)



# ふえるんです

日 沖 直 子

さて、使徒たちはイエスのところに集まって来て、自分たちが行ったことや教えたことを残らず報告した。イエスは、「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行行って、しばらく休むがよい」と言われた。出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである。そこで、一同は舟に乗って、自分たちだけで人里離れた所へ行行った。ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見て、それと気づき、すべての町からそこへ一斉に駆けつけ、彼らより先に着いた。イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。そのうち、時もだいたいぶただったので、弟子たちがイエスのそばに来て言った。「ここは人里離れた所で、時間もだいたいぶたちました。人々を解散させてください。そうすれば、自分で周りの里や村へ、何か食べる物を買に行くでしょう。」これに対してイエスは、「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」とお答えになった。弟子たちは、「わたしたちが二百デナリオンものパンを買って来て、みんなに食べさせるのですか」と言った。イエスは言われた。「パンは幾つあるのか。見て来なさい。」弟子たちは確かめて来て、言った。「五つあります。それに魚が二匹です。」そこで、イエスは弟子たちに、皆を組に分けて、青草の上に座らせるようにお命じになった。人々は、百人、五十人ずつまとまって腰を下ろした。イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、二匹の魚も皆に分配された。すべての人が食べて満腹した。そして、パンの屑と魚の残りを集めると、十二の籠にいっぱいになった。パンを食べた人は男が五千人であった。

(新約聖書 マルコによる福音書6章30～44節)

私のアメリカ留学時代の思い出を皆さまに  
お話ししたいと思います。私がアメ  
リカにいたのは2001年から2009年の8年  
間、そのうちの6年はカルフォルニア州、

パークレーにある宗教学専門の大学院でキリスト教を学んでいました。私はキリスト教の中でもカトリックの信者です。名古屋学院が属しているプロテスタント教会とは教義はほぼ同じですが、教会の仕組みや伝統がかなり違います。

例えば、プロテスタントの信者さんたちがまずやらない聖書の読み方に聖イグナチオの『靈操 (spiritual exercises)』というものがあります。これは聖書のエピソードを読んで、その場面を心の中でビジュアル化して自分がその場面に入り込んだかのように感じながら黙想することです。プロテスタントの教えは聖書の言葉とその理性的な理解に重点が置かれる傾向があると私は思います。カトリックはその点、感覚的というか、聖書を読んで何を考えるかではなく、何をどのように感じますかと問われることがあります。本来、靈操を行うには指導者の人とペアを組み、ひと月世間から離れてお籠り合宿をします。ただ別のやり方として日常生活の中で、定期的に個人で、あるいはグループで集まって行う方法もあります。大学院生時代に私はこのようなグループに参加していました。同じ聖書の箇所を読んでも、人によって随分想像している場面が違うものだなと思ったものです。この靈操では本当に聖書の世界に入ると、その場面に伴う痛みや匂いといった感覚を実際に感じることもある、といわれています。私にはそんな経験がないのですが、ただ一度だけ、今読んだマルコによる福音書6章の、魚がでてくるとこ

ろでサンマの焼ける匂いがした、と本当に思ったことがあります。

この場面のあらすじですが、イエスや弟子たちが食事をとる間もなく働き、疲れきっているところに、また群衆が押し寄せてきました。イエスは彼らに教えを述べられ、時間がたったので弟子たちは彼らを解散させようとしたのですが、イエスは彼らに食事をさせなさいと言われたのです。そこにはパンが5つ、魚が2匹しかなかったはずなのに、それが増えて何千人もの人が食事を楽しんだということです。皆さんはどんな場面を想像されるでしょうか。私がアメリカの神学校の一室で聖書を聴きながら目を閉じて想像した場面は、人里離れた水辺の砂浜のようなところに大勢の人たちがいて、イエスの弟子たちが群衆にパンではなく大量のおにぎりを配っていて、そのおにぎりは白いご飯にまだ湯気がたっているアツアツのおにぎり、味付け海苔がびたっとくっついていて、そして焼き網の上でジュージュと脂ののったサンマが焼けていて、そこで私はサンマの焼ける匂いがしたと感じました。靈操において五感で実際に感じるという意味は、聖書の物語を肌で感じて、福音書の中に自分が入り込んで、イエスと一緒に喜び悲しむことであり、時には心や体の痛みが癒されると感じることです。それなのに私が心の中で見た光景はおにぎりとサンマ、自分の意地汚さがお恥ずかしい限りです。ただちょうど秋の時期で、日本にしばらく帰っていなかったため、自分は大丈夫

と思っていたけれどもホームシックになっていたのかもしれませんが。

この靈操では、私たちに神様が心の目で見えるようにしてくださる情景と、悪魔が見せる情景があるというようにいわれます。神様が見せてくださるものと悪魔がみせるもの、その違いですが、私たちの指導を担当してくださった神父は、その情景に深い喜びや感謝の気持ちが湧き上がるかどうかだとおっしゃっていました。特に前半部分にあらわれるのは弟子たちの不安や不満、つまり、食料を分かち合いなさいとイエスに命令された時の不満、いったいこの少ない食べ物をどうやって分けようかという不安です。その不安が解消されたところで、私がおにぎりを配る弟子たちの顔にはほっとした喜び、生き生きとした気分が溢れていました。

さて、分け合うには足りないものが増えるという奇跡、それについてもう一つ思い出すことがあります。このアメリカの神学校の教授だったダグ・アダムス先生のことです。アダムス先生は私が専攻していた宗教美術分野の重鎮の先生で、とても変わった方でした。先生の講座は大人気で、学校中の学生が押しかけていて大学院の講義にしてはあり得ない70人以上という大人数の講義になりました。ところが先生は大人数クラスで配布資料を配るのが面倒くさくて、配布物をいっぺんに天井に向けて投げるのです。それを私たち学生はひらひらと落ちてくるのを待って受け止めるか、床に落ちたもの

を拾う、という、とんでもない資料の配り方を繰り返されました。アダムス先生は宗教と美術分野のまさに開拓者、パイオニアの先生だったのですが、私が行った大学院で何十年も前から、最初はたったひとりで宗教美術の講座をもっていたしやいました。先生が教え始めたころには宗教美術分野に興味を持つ学生は少なく、こじんまり、好き勝手にやれたそうです。ところが数年後、この分野に突然大学院を卒業したばかりの新任の宗教美術の先生がいっぺんに2人こられることになりました。この人事についてアダムス先生は不満で、すごく不安になられたそうです。そもそも宗教美術分野に興味を持つ学生は少なく、ここは自分ひとりで十分なのに、新しい優秀な先生たちがきたら彼らに学生を奪われてしまう、自分の仕事が奪われる、そう思われたのです。ところが、いざ2人の新任の先生たちがこられてみると、アダムス先生のクラスを取る学生の数は減るどころか増えたのです。そして新任の先生たちの教えられるクラスのほうも同じように大人気だったそうです。つまり講座の数が3倍になって、興味を持つ学生の数がそれ以上に増えたのです。パンと魚の奇跡のように最初の不安、不満これが転じて大きな喜びになったのです。

ひとつのものを分け合うことを、パイを切り分けるという言い方をします。パイのように元々決まった分量だと分ける人数が増えれば当然ひと切れが小さくなります。これをお互いに我慢

して譲り合うこと、耐えることは大切なことです。でも場合によってはこのアダムス先生の話のように全体量が増えることがあります。それはタイミングに恵まれ、かつチームワークがうまくいった時に起こります。ひとりひとりの努力がうまくかみ合わさって、さらに周囲に恵みがあると、1 + 1 が2どころか3、4に増えていきます。

例えば日本の陸上400メートルリレー、ひとりひとりの能力はそれほど傑出していないのに、世界の舞台でメダルを獲得しています。これは増えたのではなくタイムが減った例ですけれども、チームワークによって奇跡が起こった例だと思

います。私たちが実際に5つのパンと2匹の魚が5千人分の食料になるような奇跡に出会うということはない、と言ってもいいと思います。ただ、時たま出会うチームワークの奇跡、聖書のエピソードにあったようなのと同じ質の喜びを感じることは大いにあるのではないかと思います。皆さんがもしアダムス先生と同じような状況に直面して不安になることがあったら、どうかポジティブに考えて、不平不満を抱えてパイを切り分けて終わりにするのではなく、他の人たちと協力して、全体が増えることによってひとりひとりも大きくなる、そういうことにチャレンジして欲しいなと思います。

(ひおき なおこ 本学非常勤講師 2017.10.10 チャペルアワー奨励)



## 映画『ハンナ・アーレント』から考えたこと —「複数性」と「思考し続ける大切さ」—

谷 口 篤

2年ほど前にハンナ・アーレントというユダヤ人哲学者の映画を観て、その時に考えたこと、それから現在まで考えてきたことを中心にお話しします。このようなマイナーな映画になぜ心がとまったかという、アイヒマンという人物が登場する映画だからでした。アイヒマンという人の名前は、私たち心理学を学ぶ者は忘れてはならない、知らずに通り過ぎてはいけない、非常に重要な人です。この人の名前を冠したアイヒマン実験といわれるたいへん有名な実験があります。その実験は内容もとても衝撃的なものであると共に、我々のような、人を研究の対象にする者の研究倫理にも深く関わる非常に重要な研究です。

まずは、アイヒマンという人がどういう人かということから始めていきましょう。アイヒマンはドイツのナチス政権下でホロコースト、六百万人の人々を死に追いやった大虐殺ですが、ユダヤ人々を強制収容所に移送するにあたって非常に重要な指揮の役割を担った人です。彼の仕事はゲットー地域の数百万人のユダヤ人を強制収容所に輸送する責任者でした。彼はドイツ敗戦後、南アメリカのアルゼンチンに逃亡しましたが1960年にイスラエルの情報機関のモサドに拉致され、1961年からイスラエルにて戦争犯罪の裁判にかけられます。そしてたった1年後、1962年に絞首刑に処せられました。その裁判の中の証言でわかったことは、アイヒマンはユダヤ人を抹殺することに使命感を感じて

いたわけではありませんでした。仕事をただ順調にこなしていただけでした。有能な官吏であり続けるために、アイヒマンはたまたま与えられた収容所への移送等の実務を担当するようになったに過ぎない、ただただ職務に忠実な官吏の一人だった、とハンナ・アーレントは捉えています。

アメリカの心理学者スタンリー・ミルグラムは、やれといわれたことをただ職務に忠実にやっただけで、何百万人という虐殺に関与してしまったアイヒマンは特別な人だろうか、それともごく普通にどこにでもいる人だろうか、本当に普通の人か誰でも同じようになりうるのだろうかという問題意識から、後にアイヒマン実験と呼ばれる実験をアイヒマンの処刑の前1961年から始めています。どういう実験だったかということをおまかにいうと、体罰と学習効果の測定という目的の実験として研究協力者を集められました。実はこの目的は、全くのダミーです。実験では80名ほどの人が集まったのですが、研究協力者は隣室にいる学習者が間違える度にだんだん強い電気ショックを与える事を指示されます。最初は10ボルト、そこから15ボルトずつ強くしていくというふうに、間違える度に電気ショックを強くするボタンを押していくという実験です。ですが実際のところ学習者は全然電気ショックを与えていません。与えられたという前提で、ボタンを押したら「痛い！」という、そういう演技をするだけです。ボタンを押す研究

協力者はだんだん電気ショックを強くしていきます。強くしていくと研究協力者には良心の呵責がだんだん出てきます。そして「本当にこんなことをしているのか」と研究協力者は実験者に問いかけます。そうすると白衣を着た権威ある博士らしい人が出てきて、感情をまったく出さない超然とした態度で次のように通告します。「続行してください。この実験はあなたに続行していただくなくてはならないのです。あなたに続行していただくことが絶対に必要なのです。迷うことはありません。あなたは続けるべきです。」そう言い続けられます。最後の最後に、最大450ボルトのスイッチがあります。実験の結果、450ボルト、おそらく本当に電気が流れたら人が死ぬ数値ですが、その450ボルトのスイッチを65%の人が押ししてしまいました。その他にもミルグラムはいくつかの実験をしましたが、だいたい61～66%の人が強い電気ショックを与えてしまいました。人間は命令されればそんなことができちゃう。そういう実験です。このアーレントの映画を観るまえから、この程度の事は知っていましたが、もっとよく知りたいと思い、映画を観ました。

映画ではアイヒマンの裁判そのものも描いています。しかもイスラエルでの裁判の実写映像を取り入れた映画です。ナチスから逃れアメリカに亡命していたユダヤ人、アーレントはイスラエルでその歴史的裁判に立ち会いたいと、ザ・ニュー Yorker というニュース誌にかけあい、旅費をもらってレポートを発表します。彼女が描いたアイヒマンは、多くの人々が思い描く極悪非道な人ではなく、ごく平凡な人でした。彼女はそれを「凡庸な悪」と名付けました。その衝撃的な内容に世論が揺れ動きアーレントは非難される、そんなことが映画の中でできます。

この映画を観ていて思ったことがあります。今の日本という国の状況の中にアイヒマンがたくさんいるのではないかということ。最近の国会で騒がれている問題、どこかで誰かが止めなければいけないものを止めていなかったと思えるようなこと、そういったことがずいぶん前から進んでいると感じています。その一方で、ちゃんと声を出せる人たちもいる、そういったことも感じています。

ハンナ・アーレントの映画を観て、興味が出てきたのでアーレントの著書も読みました。本というのはハンナ・アーレントの『イェルサレムのアイヒマン－悪の陳腐さについての報告』という本です。翻訳が出ていますので興味ある人は読んでみてください。そこでハンナが描いたアイヒマンはどのような人物だったのか、ハンナはこんな風に書いています。「与えられた職務を淡々とこなす陳腐な役人であったからに他ならない。問題はどんな内容の業務命令でも自分の判断を交えることなくこなすのだ。道徳に著しく反するように思われる命令に対しても良心の呵責を覚えないうことです。答えは「イエス」です。彼はそこで葛藤を覚えることなく陳腐に(平凡にと翻訳されるケースもあるかもしれませんが)その業務を遂行し続けることができちゃった。彼は自分の頭で善悪の判断をしないのです。無思想な人格だったので。」「自分の昇進には恐ろしく熱心だったということの他には彼にはなんの動機もなかったのです。そしてこの熱心さはそれ自体としては決して犯罪的なものではなかった。勿論彼は自分がその後釜になるために上役を暗殺することなどは決してしなかっただろう。俗な表現をするなら彼は自分のしていることがどういうことか全然わかっていなかった。完全な無思想性、これは愚かさとは決して同じではない。それ

が彼があ時代の最悪な犯罪者の一人になる素因だった。」と書いています。

そしてアーレントが考えたことがどういうことだったのかと考えると、憐れみではなく、アイヒマンをナチスに運命的に巻き込まれてしまった平凡な人として同情しているわけではありません。彼らが悪くないと言っているわけでもない、宗教的な赦しを説いているわけでもありません。例えば聖書のヨハネによる福音書8章にこんなことが書いてあります。イエスが姦淫した女性を石打ちの刑にしようとしているユダヤ人の民衆に対して、罪がないものだけが石を投げなさいと言って群衆を去らせます。しかしアーレントは特定の宗教の理念に基づいて倫理を語っているわけではありません。彼女はむしろアイヒマン裁判で問題になったのは法的な公正としての正義であって、正義と宗教的な赦しを混同すべきではない、という立場をとっています。やっていることを、それとは異なる他者の視点から見るのがないから、黙々と命令を遂行できるとアーレントは言っているのだと思います。

アーレントにとってナチスやスターリン政権下で端的にみられる陳腐さの本質は、多くの人を殺したこと、それ自体よりも、自分たちと考え方の違う異なったものを抹殺することによって、活動の余地をなくし、「複数性」を消滅させようとしたことにあるように思います。複数性というのは私の解釈ですが、いろんな人のたくさんの意見がある、そういうことだと思っています。そして複数性を喪失した人間は他者との間で本当の意味での対話をするができなくなる、と言っているのだと思います。

最後にこのアーレントの映画の最後の

(たにぐち あつし スポーツ健康学部教授 2017.7.7 カレッジアワー奨励)

場面、アーレントは煙草を吸いながら大学の講義室で学生たちに講義をする8分間の演説場面があるのですが、その中から私の一番言いたいことに繋がりそうなことを引用させていただきます。「アイヒマンを罰するという選択肢も許すという選択肢もない。彼は検察に反論します。『自発的に行ったことは何もない。善悪を問わず自分の意思は存在しない。命令に従っただけだ。』と。」これはアイヒマンの言葉です。それに対してアーレントはこう告げています。「世界最大の悪は平凡な人間が行う悪です。その人には動機もなく信念も、邪推も悪魔的な意図もない。彼のような犯罪者は人間であることを拒絶した者です。アイヒマンは人間の大切な質を放棄しました。思考する能力です。その結果モラルまでも判断不能となったのです。思考ができなくなると、平凡な人間が残虐行為に走るのです。思考の嵐がもたらすものは善悪を区別する能力であり、美醜を見分ける力です。私が望むのは考えることで人間が強くなることです。危機的状况にある人も考えれば破滅に至らない。」

最後に、ハンナ・アーレントから学んだことを、皆さんに、そして自分へのメッセージとして、お話しさせていただきます。「どうか、考えるのをやめないください。先輩など上の人から言われたことを思考することなく、そのまま実行するような人にならないでください。どこかに凡庸な悪が隠れているかもしれませんから。そして、自分の独りよがりの考えに陥っていないか、違う人の考えはどうだろうかと想像してみてください。それが複数性ということであり、思考をやめないことでもある」と思います。

# 伝えるための言葉

柳 善 和

本学の建学の精神は「敬神愛人」、「神を敬い、人を愛す」ということです。私は英語を教えています、その中でも英語教育学や応用言語学を研究分野としているので、いつも言葉のことを考えています。「神を敬い、人を愛す」というこのコンセプトも、言葉にして相手に伝えることで実現するのだと思います。そういった意味でも言葉というのは大事なものだと思っています。

ところで旧約聖書の中にバベルの塔の話があります。実はこの話は私が中学生の時、英語の暗唱大会のテーマでしたので、一生懸命この文章を暗記し、気持ちを込めて言えるように何度も練習したものですから、頭の中にすっかり染み込んでいます。バベルの塔の話はこういった話です。昔、人間たちは自分たちで富を蓄積して、技術を開発し、だんだん自分たちが全能だというように勝手に解釈し始めました。そしてとうとう、その富と技術を使って高い大きな塔を作ることを企てるわけです。これがバベルの塔、"The Tower of Babel"と言われるものです。人間たちは、このような高い塔を作って神様のいる天国まで届かせようとしたのです。神様はそれを天から見ていて、「人間たちは、とんでもないことを考えている、これは神に対する挑戦ではないか。」

と怒って、人間たちにそれぞれ違った言葉を与えてしまいます。そうすると、人間たちはお互いコミュニケーションを図ることができなくなって、それで世界中に散っていったという話です。これは聖書の中でもいろいろな解釈が分かれる話のようで、私から詳しく話すことはしませんが、それにしても今、世界中には言葉が6,000～10,000あるといわれています。ですからある意味で「バベルの塔」の話は何かどこかで通じるような気がします。

6,000～10,000の言葉が世界中にあると言いましたが、言葉というのは何億もの人が話す言葉もあれば、話す人が少なくなり、まもなく消滅していけらうと考えられている言葉もあります。何億もの人が話している言葉というのは、世界中の人から勉強され、あるいは覚えようと努力をされています。例えば英語は事実上世界の共通語ということになっていて、ですから皆さんもTOEICや英検などを受験して就職活動でアピールします。

共通語ということに関して、他にも話したいことがあります。

150年前に明治政府ができました。この時に明治政府は共通の話し言葉を作ることを最も重要な課題の1つと考えていました。それまでの江戸時代には、日本は藩

に分かれていて、普通の人たちはそれぞれの藩に分かれて暮らしていましたし、ほんの狭い地域の中だけで一生を送っていました。武士階級のごく一部の人たちだけが、参勤交代で藩主が江戸に行く時に同行して、江戸の藩屋敷でいろいろな仕事をしていました。この人たちは、それぞれの方言だけでなく、他の藩との打合せなどの仕事で、お互いが分かる言葉として、江戸の上流階級の言葉などを習っていました。それぞれの藩主がいて、その身の回りだけで暮らしていたわけです。

明治政府はそれまでの士農工商という身分制度を廃止して、四民平等を唱えましたが、その義務の一つに徴兵制があります。軍事力の整備に乗り出したのです。そうすると、それぞれ今まで方言で喋っていた人たちを全部1箇所に集めて訓練をする必要があります。その時にはもちろん武器を持たせるわけですが、その時に、上官の命令が正確に伝わり、お互いのコミュニケーションができる必要があります。上官の命令が理解できない人に武器を持たせてしまっ、それが集団になっていると、何をしでかすかわからないので、そのためにも標準語を作らないといけないという深刻な問題だったわけです。現在の日本語の標準語はそうやって作られてきたわけです。

ところで皆さん、言葉はいくつ使えますか。私は英語苦手だから…そういう英語のような外国語だけではなくて、言葉というのはいろんな生活の場面で使い分

けているものです。例えば友達と話す時、先生に話す時、時々友達に話すように話している人もいますがそれは置いておいて、バイト先でお客様に話す時、全部言葉が違うわけです。言葉が苦手だという人も、言葉を使い分けています。でもそれは日本語のバリエーションの一つではないか、場面によって使い分けているだけだ、という人もいるかもしれません。でも名古屋で生まれて育った人はだいたい名古屋弁を喋ります。お友達同士が名古屋の人だったら名古屋弁で会話しますよね。でもこの大学にくると名古屋の人ばかりじゃないので、あまり名古屋弁を出さずに、ちょっと控えて話しますよね。あるいは東京や大阪に就職活動で行くと、まさか会社の人にそのまま名古屋弁で喋らないでしょう。そういった意味では、私たちはいろいろな言葉を使い分けていることになるわけです。

私は鹿児島島の出身で中学校までは鹿児島島で育ちました。今たぶん私の言葉を聞いて鹿児島島の出身だとはわからないと思います。高校の時から標準語で教育を受け始め、大学は別の地域へ行ったので、その時からほとんど鹿児島弁は使わなくなりました。結婚したのも別の地域の人です。今では鹿児島弁を使っていません。けれども鹿児島に帰った時にはすぐにスイッチが入って一定のレベルまでは鹿児島弁を使います。そういう使い分けをしています。昔は学校で方言を使っていると直されました。「方言はあまり使っちゃいけない」という教育を受けました。

ところが今は鹿児島で車を運転する時に聞く民放のラジオ放送では、ニュースは標準語で放送しますが、バラエティー番組ですとアナウンサーの人が鹿児島弁を使いながら放送をするようになっていて、その意味では方言と共通語が共存している、マルチリンガル(多言語)な世界、社会というのができつつあるなと思います。これはなかなか面白いです。

先ほど世界の言葉の数を6,000～10,000と言いましたが、なんでこんなに数字が離れているのかというと、言葉が違うか同じかを区別するのは学問的には実はたいへん微妙で、さらに政治的な問題も絡んできます。例えばノルウェーという国があります。あの国の言葉を今はノルウェー語と言います。でもノルウェー語というのは実はデンマーク語だったのです。昔、北ヨーロッパはデンマークとスウェーデンが二大大国でした。グリーンランドという大きな島がありますが、あれもデンマークの領土でしたし、デンマークの領土は今よりもっと広がったのです。ノルウェーはその後独立します。その時に言葉はデンマーク語のノルウェー方言だったわけですが、やはりデンマーク語を喋っているというのと恰好悪いですね。ノルウェーの国なら

(やなぎ よしかず 外国語学部長・教授 2017.4.27 カレッジアワー奨励)

ノルウェーの言葉をとということで、ノルウェー語としました。こういう区別、区分けというのはとても曖昧です。そういうことで皆さんも自然に意識しないうちに色々な言葉を使っているということになります。ただ皆さん不幸なのは、小学校や中学校で習い始める英語というのは本来、日本語と全く違う言語ですから、だからなかなかうまく吸収できないという恨みはあると思います。でも一生懸命言葉を使って、自分の想いを伝えようと努力することは、必ずいいことがあります。これから皆さん大学を卒業して社会に出て活躍しますが、年を重ねていく時に言葉の引き出しがたくさんあった方が人生楽しくなるでしょう。外国に行った時に、その外国の言葉で、「ありがとう」「こんにちは」「どうぞ」「さようなら」という言葉だけでも言えると、その国の人たちはたいへん喜んでくれます。そういった意味では気軽に楽しく言葉を学んで、多くの人とコミュニケーションできるようになると嬉しいな、という風を感じています。そして、いろいろな言葉を使って、自分が思っていることを、多くの人たちに、いろいろな表現で伝えることができるのもまた嬉しいことだと思います。

## イエスと一緒に歩く

葛井 義憲

こうして、一行は湖を渡り、ゲネサレトという土地に着いて舟をつないだ。一行が舟から上がると、すぐに人々はイエスと知って、その地方をくまなく走り回り、どこでもイエスがおられると聞けば、そこへ病人を床に乗せて運び始めた。村でも町でも里でも、イエスが入って行かれると、病人を広場に置き、せめてその服のすそにでも触れさせてほしいと願った。触れた者は皆いやされた。

(新約聖書 マルコによる福音書6章53～56節)

主イエス・キリストの名のもとに本学は創立されました。本学はキリストの働きを証していく大学です。多くの先輩と皆さんの日々の営みの中でここまでキリスト教主義大学としての役割を果たすことができている。そして私たちが思っている以上に、全国の、世界中の人々の祈りの中でこの大学の教育が営まれていることを自覚していきたいと思います。

マルコによる福音書6章の53節から56節には主イエスを求めて集まる人々の熱い思いが丁寧に記されています。私たちは人生で迷うことが度々あります。病むこともあります。行先が見えず困り果てることもあります。そのことはこの世の中を歩む上で、特定の人だけでなく、私たち一人一人すべてにしばしば訪れる避けられない事柄であります。聖書の中に記されているように、イエスの後を追う人々は心にも体にも痛みやつ

らさ、悲しみや苦悩を持っています。自分たちの肩にそういったものがのしかかっています。例えば、病むことはつらいです。病による苦しみ、痛み、そして一人前に働けないことなどの申し訳なさがあります。さらに、近くで寄り添って看病してくれる人の精神的、経済的労苦に、申し訳ないという思いも持ちます。看病される人も看病する人もその病が快方に向かうかどうか、その病がいつ決着するか、ある程度病の推移を予測できるならまだ希望を持って一日一日を過ごせます。しかし、その見通しが立たないと、病める者の心も体も、看病する家族、近隣の者たちの心も体もすり減りへとへとになっていきます。これは現在、高齢化社会となった日本中のあちらこちらで見受ける光景であります。

聖書にイエスを追い求める人々が書かれています。ゲネサレトという、イエスと

多くの弟子たちが幼い時から生活していたガリラヤという地域にある平原に、カファルナウムというところがあります。主イエスが宣教を開始された場所です。主イエスにとってはこの世界での故郷ともいってもよい場所です。それゆえ主イエスの力や威厳や優しさは、ここに生きる人たちにとって身近なものでした。イエスが活動された時代のガリラヤはどのような状態であったのでしょうか。歴史家の成果によりますと、この大地は肥沃な土地でありました。花々や木々や果実に囲まれておりまして、たくさん魚が捕れるガリラヤ湖にいだかれていて、美しい場所だった、といわれています。ごつごつとした岩だらけ、砂塵が舞う砂漠地帯ではなかったのです。このガリラヤ地域のところどころにはローマ風の建築物がありました。そうしたものが珍しくもありませんでした。つまり遠くローマの匂いが漂う場所でした。このガリラヤを治める人物は領主ヘロデ・アンティパスという人でした。この人はローマの保護を求めています。彼は領主ですからガリラヤの人に幸せに生活して欲しいという望はあったのでしょうけれども、心のうちはパトロンであるローマのご機嫌取りに必死でありました。多くのガリラヤの人々はその日その日の生活が精一杯でした。彼らには重しのようにのしかかるローマの税金がありました。ですから人々の社会生活からも、毎日の暮らしからも、なかなか希望が現れてきません。心に苦しみをを感じる人たちが増えていきま

す。重荷や痛みや苦しみを持つ人たちが主イエスの行先を探し求めて押し寄せてきます。それは病人だけではなく。そこには看病する人たち、介護する人たちも一緒に来て、主イエスが来たと聞いたら走り寄ってきます。非常に奇妙な光景ですが、必死な思いもそこには流れています。何が起るのだろうかという期待があります。笑い声があります。あるいはイエスが見えないから座れというような怒鳴り声があちらこちらで上がっていたかもしれません。

マルコによる福音書では、村でも街でも里でもイエスが入って行かれると、病人を広場に置き、せめてその服の裾でも触れられて欲しいと願ったと書かれています。病む者、看病する者、主イエスと交われば元気がでる、生きる力が湧いてくる、そうした必死な思いを伝えています。それと共に、藁にもすがるような思いで主イエスに頼る人たちのせつなさ、痛みが溢れています。なんとかこの痛み、つらさを取り除けてくれという想いが湧き上がっています。さらに聖書をよく読むと彼らの周り、イエスの周りに暖かな空気が流れていることがわかります。人々の顔に安らぎの色が現れてくるという奇跡があります。その安らぎというのがどのようなものか。主イエスが私たちの痛み苦しみつらさを知ってくださるということです。そして今でもいろんな人たちがイエスに近づき、手を繋ぎ、支え合い、励まし合います。病むことや苦しむことは人々に孤独を与えます。私一人だ

けが苦しい。そんな拒絶感を抱くものです。多くの人たちは主イエスを訪ねて行きました。けれど人々は彼と出会うだけで、凍りついた顔から笑みがこぼれます。これまで自分以外の人たちの痛みや病などにまったく気づかず、自分の痛みだけを思っていたのですが、彼と出会うことで自ら笑むことができるようになる、そういう安らぎを与えられます。そうすると、自分の周りにいる、病んでいる人たちに対して心が動いていきます。どうしたんだ、どこが苦しいのか、どこが辛いのだ、と。そしてその人と別れる時に、お大事に、という気持ちが心の中で湧いてくるのです。この変化、この発見、自分のことを思ってくれる人がいる、そして自分にも他の人に心を通わす心があったのだ、こうした変化発見に一人一人が気付くのです。もう自分は孤独ではないというように。心を凍らせていた孤独が消えていくのです。そうして静かな安らぎが訪れます。病む人、看病する人たちがガリラヤの各地から主イエスに会いにやってきます。主イエスの大きな愛に触れるために、主イエスの癒しの力を得るために

集まってきます。そしてそこで主イエスにお目にかかりお言葉をいただきます。人々は、はっきりと自分たちは忘れられていなかった、自分たちは覚えられていたのだと確信します。この貧しき私たちは、この名もなき私たちも、主イエスに覚えられ、主イエスを遣わされた命の源の神様が大きな愛によって私たちを包んでくださっている、と知ることができます。痛み、痛みが安らぎへと変わってきます。明るい明日へと変わっていきます。ゲネサレトの平原に聖霊の風が吹いてきます。そして人々の心と体が洗い清められていきます。聖霊がそこに集まる人々のうちを駆け抜け、救いを求める祈りに繋がってきます。

本学は創立記念日を迎えました。今まで先輩たちが一生懸命に本学を支え、イエスの言葉を聴いてきました。そして本学をイエスの愛で溢れる学校にしようとしてきました。皆さんはまさにその歴史を繋いで、キリストにあって生きるという気持ちでいていただきたいと思えます。本学の発展を心から願っています。

(ふじい よしのり 法学部教授 2017.10.17 創立記念日礼拝奨励)

